



RI 第 2 6 1 0 地区

## 井波庄川ロータリークラブ会報

2010-2011 年度 No. 3 5

事務局 〒939-1635 富山県南砺市福光 7336-4 福光会館 3F

ふくみつ光房内 TEL 0763-53-1333 F A X 0763-53-1334、(レイ・クリンギンスミス会長)

[INASHORC@athena.ocn.ne.jp](mailto:INASHORC@athena.ocn.ne.jp)

2010-2011 年度 会長 山本武夫、幹事 助田幸雄

2010-2011 年度 RI テーマ



「地球を育み、  
大陸をつなぐ」

## 例 会 記 録

### 第 1 5 6 6 回例会

平成 2 3 年 3 月 3 0 日(水)

井波文化センターエイトホール

1. 点鐘 会長
2. ソング 我等の生業
3. ゲスト卓話紹介：千秋謙治氏(南砺市文化財保護審議委員会 会長)
4. ビジター：忠永 明君(小矢部中 R C)



5. 会長の時間：東北関東の東日本大震災の後、被災された方の支援が少しづつ進んでいるようですが、まだまだ原発の問題もあり、なかなか思うようにはいってないようです。昨日、TVでサッカーのチャリティー試合があり、頑張れニッポンと被災地を支援するために放送されました。今、いろんなことで自粛自粛というムードですが、このままでは日本の経済が冷え込むと心配されてもいます。考えていかねばならないと思います。関連して、2610 地区からの大災害被災者支援プロジェクトについて、いろいろ対応に追わ

れているようです。当クラブでも、本日例会後の理事会で、募金方法を検討したいと思います。

それから、4 月 11 日に「となみ野公共交通フォーラム」実行委員会が、あります。会長幹事のほか、社会奉仕委員長、会長エレクト、次期幹事にも出席要請が来ておりますので、宜しくお願いします。

さて、本日ゲストの千秋謙治先生は、中学時代の社会科の恩師であります。大変面白い授業をされ、よそ見をする生徒がいなかったことを覚えております。本日は、この大震災にちなんだ話と聞いております。よろしくお願いします。それから、ビジターの忠永様ようこそ、ゆっくりお寛ぎください。

6. 幹事報告：①例会変更が来ております。(詳細は事務局まで)②「ハイライトよねやま」号外が来ております。大震災に関連してのものです。併せて、米山梅吉記念館、館報もきております。
7. 委員会報告：①親睦委員会(岩崎委員長)：4 月 13 日、創立記念観桜会は、雨天時の対策もあり、桜の花見がちょうど良い頃の三楽園のホールで行いたいと思います。通常例会の予算の範囲で花見弁当を頂きたいと思います。ふるってご参加ください。②高瀬エレクト：次期役員案(下記)を発表します。③山本会長：今年も「南砺の山々を守ろう！」植樹祭に、実行委員会から、協賛(名義)依頼申請書と招待状が来ております。例年通り、協賛させて頂き、皆さんで積極的に参加しましょう。

~~~~~

#### 2011-2012 年度井波庄川ロータリークラブ役員案

会長：高瀬顕正

副会長：小西勝

幹事：浅田裕二

副幹事：斎藤彰

会計：坂井彦就

S.A.A.：岩崎修

会長エレクト：河合耕一

◆クラブ奉仕委員会：◎水島政光○三谷貴志夫

・出席・プログラム委員会：◎水島政光○岩崎修

・親睦委員会：◎荒木憲一○上田昭二

・会報委員会：◎横山幹○山本武夫

・会員増強委員会：◎助田幸雄○荒木憲一

・広報委員会：◎三谷貴志夫○岩崎修

◆職業奉仕委員会：◎坂井彦就○斎藤彰

◆社会奉仕委員会：◎三角信行、横山幹、上田昭二

・新世代委員会：◎長谷川吉美○助田幸雄

◆国際奉仕委員会：◎山本武夫

・ロータリー財団委員会：◎助田幸雄○三角信行

\* 2610 地区

・広報委員会委員：小西勝

・米山奨学生カウンセラー：斎藤彰

(2011-2012 年度理事)

会長：高瀬顕正

幹事：浅田裕二

会長エレクト：河合耕一

理事：小西勝、斎藤彰、山本武夫、三角信行、水島政光、坂井彦就、上田昭二

~~~~~

#### 8. ニコニコBOX(本日 3 名 5000 円、2 月計 16000 円 3 月計 28300 円、年度累計 503460 円))

**河合会員**：長い 3 か月が終わり、いよいよ本番です。

**山本会長**：本日は、卓話に中学の恩師、千秋先生がお越しいただきました。小矢部中 R C 忠永様、ようこそ。

**助田幹事**：「議員は要らない、定数削減等」が、テーマの東京研修会に行ってきました。千秋先生、本日は有難うございます。

#### 9. 出席委員会報告：19 名中 16 名出席（調整後 88.89%）



#### ゲスト卓話「砺波地方から相馬への移民」

千秋謙治氏(南砺市文化財保護審議委員会会長)

**助田幹事(紹介者)**：千秋先生には突然、昨日になって卓話をお願いすることになり、まことに恐縮です。本日はよろしくお願い致します。

**千秋氏**：今まで、何回か、このクラブでも話をさせていただきました。日本中、あちこち民族学の研究で調査にいきますが、今は九州熊本で、西南の役で、薩摩と政府軍の戦いがあった熊本鎮台の事を調査しています。

今回、東北関東で、各界を震動させる大事件(大災害)がおきましたが、その被災地の相馬市への砺波地方からの移民の研究を平成に入ってから行っておりました。このたび、利賀から相馬へ移民した経緯があるらしいとのことで、市から尋ねられ、南砺市全域から移民の事実があることを報告すると、新聞報道のような、南砺市の田中市長が相馬市を大震災の見舞いに訪問されるまでになりました。その時のチラシ等の資料は、私がお渡ししたものです。3 年前に、砺波農村地域研究所の研究会で発表したものですが、一部本日資料をお持ちしました。

そもそも、東北と南砺のつながりは、養蚕の調査や、奥の細道の調査などから、移民の事実が浮かび上がり、私自身、現地調査を兼ねて相馬市を訪問しました。そのあたりは、福島県でも浜通りといわれる地方で、東京電力が発電所を持つ地域です。平成の大合併をしなくても裕福な町村ばかりで、面白いことに、2 町の境界に発電所が設置されています。

発電所よりも北の相馬市は、江戸時代に相馬中村藩 5 万石の地で、いわゆる天明の大飢饉では、藩の人口の

9~10%が亡くなり、人が人を食ったとも言われました。農民の大半が死に絶え、藩は侍の俸給を10分の1にしたり、幕府に援助を求めたりしたが、小藩への援助をスズメの涙程度で済まされ、藩財政が壊滅しました。緊急の立て直しをせざるを得なくなり、農村復興を喫緊の課題として働き手の確保の施策(新百姓導入政策)を進めました。『ヤマセ』という太平洋からの冷たい風に夏でも冷害が続発して、これに対応しないと東北では生き残れません。

働き手の条件としては、冷害にもめげず勤勉に働く者、簡単に逃げない者、支えあいのできる家族ぐるみで移民できる者、信仰心の篤い者などが新百姓導入策として、中村藩は移民の受け入れを画策しました。出身地が北関東や東北ではすぐ、逃げたりするし、子供がたくさんで食べられないと間引きなどの風習がある地の出身者では、人口増加が計れないなどから、真宗の盛んな北陸の地が選ばれたようです。

そもそも、東北には昔は真宗門徒はなく、修験道が主であったが、中村藩は移民を受け入れるためには、相馬に真宗寺院をつくる必要を感じ、それに応じた砺波郡の勇氣ある僧(寺院の次男など)たちが先鞭をつけて向うで庵を開き、そのうちに寺にするなどしていきました。中村藩の移民政策に、それらの真宗寺院が、仲立ちをしたのです。相馬の寺院が北陸・南砺の寺院に斡旋を依頼して、手次(檀家)の寺が紹介して、南砺の農民が相馬の真宗寺院を頼って移民をしていったのです。次男・三男家族ぐるみでの移民を仲立ちしたのです。歴史の教科書にある「入り鉄砲に、出女」など、昔の関所は人の出入りに厳しいというのは、史実に反し、割合自由な行き来ができていたようです。藩からもらう手形が一番信用が厚いのですが、寺院の発行する過所手形でも問題なく、稀には手形がなくても関所近くの旅籠でも偽手形を発行してくれたというそうです。

南砺でも移民せざるを得ない次男・三男家族は、比較的もうすでに開墾が行きわたり、長男から分け与える土地がなくなった地域にみられます。なるべく地区で固まって移民をした形跡も見られます。家族でまとまって動くのも、表向き移民は加賀藩としても働き手が減るのを嫌っていますので、関所を別々に通るか、東北へ渡るルートを変えて行った可能性が多いと記録にあります。多くは親鸞ゆかりの寺のある越後経由で行ったものでしょう。手次の寺の

記録には、ここを出発した日時があり、相馬には、引き受けの寺に到着した日時の記録があります。その途中のルートは、不明です。移民した農民は、相馬中村藩の各地域の豪農の手厚い保護で、茶碗などの家財道具から、農機具や、野菜の種・粃なども配給され、家なども修理されて与えられたりしたそうです。

それでも、移民した真宗門徒と、土着の農民との風習・信仰の違いは大きく、摩擦や軋轢が当初は多かったようです。浄土真宗では、家には立派な仏壇を飾り、お寺に参りに行きます。亡くなったら火葬をして、お骨を墓に埋葬します。ところが、修験道の真言宗では、亡くなって火葬などという残酷なことはせず、土葬を行います。【今度の震災でも、被災者を土葬するケースもありました。：北陸ではありえないでしょう】

それに対して、相馬中村藩では、二宮尊徳から教えを受けた高弟である富田高慶が、藩士から農民に至るまで、窮民の撫育や難村の再生に精力的に取り組ませるよう二宮仕法を徹底させました。村人に至誠・勤労・推譲・文度の4カ条が説かれ、具体的な農業経営、技術の指導が行われて、移民した南砺の新百姓家族は二宮金次郎の報徳思想に支えられ、母村に根付いていた精励の心や、深い親交の心を持って異郷相馬の地に同化して定着していったのです。

【本日、3枚の資料を提供していただきました。：尚、砺波農村地域研究所の研究紀要の千秋先生の発表を、HPに掲載させていただきました】